審査の結果の要旨

氏名　松永　幸子

本研究は、17 世紀から 18 世紀にかけてのイギリスにおいて激烈な展開を見せた「自殺論争」を分析し、そこに見られる人間・生命・モラリティの観念を抽出することを企図するものである。さらにその論争の最中に設立された国内初の自殺防止協会ともいうべき「王立人道協会」(Royal Humane Society――以下 RHS と略記)の設立を促した思想的背景や具体的活動内容を、当時の社会的評価にまで踏み込んで解明することにより、考察対象および方法の面で思想史と社会史に相わたる作品となっている。

本論文は序章および結章を含む 7 つの章および表・文献リストより構成される。序章では、研究の課題と方法が定位され、先行研究および史料についての予備的考察がなされる。第 1 章では、RHS の全容が解明され、この協会が設立当初から自殺者救助を目的としており、イギリスで初めて人工呼吸法を実践しその普及を図ることで、生の価値をテクノロジーの土俵の上で宣揚する自覚的なムーヴメントであったことを確認する。

第 2 章～第 4 章では、RHS 設立の背景にあった自殺論争について、①擁護論、②批判論、③医学的自殺論の順に検討が加えられる。まず自殺擁護論の系譜をたどった第 2 章では、自殺把握のキリスト教的伝統を概観したうえで、イギリス初の自殺論であるジョン・シムの『自殺に対抗する生命の保存』(1637 年)、最初の自殺擁護論であるジョン・ダンの『ビアタナトス』(1647 年)、さらにヒュームの「自殺論」（1783 年）が彼の道徳論・教育論との関連において精査される。第 3 章では、アダムスの『自殺論』(1700 年)を嚆矢とする自殺批判論の動揺と反撃の実相が、「家族」や「教育」（Education）というキー概念に注目しつつ記述される。第 4 章では、17 世紀以前の医師たちのメランコリー論を踏まえながら、18 世紀の医師たちの代表的な自殺論について検討し、自殺が悪魔憑きや体液論的規定から解き放たれて神経病による規定へとその様相を変容させていった過程が活写される。

第 5 章では、自殺論争の延長上に位置する RHS の思想史上の位置価を見定めるべく、設立者で医師コーガンおよび牧師グレゴリーを中心にして協会の思想を精査する。彼らにおいて自殺は「過剰な（尋常でない）情念」の帰結と認識されており、情念の統制・精錬を旨とする「教育」の改善が自殺防止の手段として有効であると評価されていた。こうした枠組みが、自殺をすぐれて精神衛生の問題とみなすその後の自殺防止対策の源流を形成することになったのである。結章では、論点の総括と今後の課題が述べられている。

以上のように、近世イギリスにおける自殺論が「自己保存」・「狂気」・「モラリティ」という論争軸をめぐって展開されたことを本研究は明らかにしえた。諸史料の扱いにいくぶんかの精粗のばらつきが見受けられるものの、「自殺論争」の思想と RHS の実践との吟味を複数の《ユニット・アイデア》を軸に接合しようとする方法的意図は壮大であり、これまでの思想史・教育史の空白を埋める作業として高く評価されてよい。その点で、今後の教育研究に少なからぬ貢献をなすことが期待される。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認定した次第である。